慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ステファヌ・マラルメ「ゴシップ1875-1876」『アシニーアム』(3)(翻訳)
Sub Title	Stéphane Mallarmé : "Gossips 1875–1876", Athenaeum (3) (traduction)
Author	Mallarmé, Stéphane(Harayama, Shigenobu) 原山, 重信
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2012
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.54 (2012. 3) ,p.61- 71
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20120330-0061

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ステファヌ・マラルメ「ゴシップ 1875–1876」『アシニーアム』(3)（翻訳）

原　山　重　信

承前

11.　1875 年 11 月 21 日　掲載されず

芸術ゴシップ[1)]

パリでは、リチャード・ウォーレス卿[a)]も参画する〈委員会〉が美術学校で催す『バリー作品展覧会』に、週の初めから観客が殺到している。ルーヴルとチュイルリーを飾る傑作は、一時的に二会場に運ばれ、その動物彫刻家の有名なブロンズ彫刻が殆ど全て並べられている。結局、公衆に対する啓示として、壁では、フランスがかつて持った最も偉大な彫刻家の一人と誰もが率直に信じていたこの巨匠による並外れた絵画と水彩画が鑑賞される。「ケンタウロス」「二輪馬車に乗ったアポロン」「ルーヴルの四グループ」を挙げるのは無意味である。それほど目立つものなのだ。700 点以上の作品が展示され、その中にはバリー自身によって実物から複製された作品も含まれる。

★

コメディー＝フランセーズの玄関と休憩ロビーに立ち入ったことがある者なら誰でも、丸彫り像と半身像のほかに、千のブロンズ彫刻、テラコッタなども、劇場の隅々を演劇の卓越した画廊にしていることを知っている。オデオン座の支配人、デュクネル氏〔(1832–1915)〕は、再建され、昨日から開場されたこの劇場に、これに劣らず興味深く、豊かな美術館を恵んだばかり

だ。存命中の、或いは亡くなった、著名な俳優をもとにした絵画にせよ、大理石像にせよ、彼の施し物をそこにもたらすことを名誉としなかった現代の画家、彫刻家は一人としていない[2)]。

★

フランスで、『絵画と彫刻の展覧会』に関して、大きな危険が回避され、ちょっとした利益が得られたところである。「美術委員会」の採択により、芸術制作がもっと時間的余裕をもってできるように、毎年の「サロン」が3年ごとの展示に取って代わることになっていた[3)]。こうして、公衆に伝統的な芸術祭の習慣をやめさせるのだ。「上級会議」は、国家によって芸術に与えられる承認を重々しく稀なものにしていたこうした考えから、毎年の〈サロン〉よりも重要な5年ごとの〈サロン〉の計画を保ちつつ、事態を以前の状態に保った。そこで、芸術家は2つの代わりに好きなだけの作品を展示し、彼のキャリアの一局面を要約することができるだろう。

この冬の催し物として、A. デュマ・フィスの後援によってなされたあの哀れなタサエールの展覧会もお知らせしておこう。この画家は、忘却、老衰、悲惨のうちに、昨年自殺したのだった[4)]。

1）『アシニーアム』1875年11月13日号、p. 647（後出、p. 84を見よ）は、11月15日のバリー展覧会の開会を告げているが、このマラルメのテクストは掲載されなかった。

　アントワーヌ＝ルイ・バリー（1795–1875）は、偉大な動物彫刻家で、亡くなったばかりだった。

2）　このメモも『アシニーアム』には掲載されなかった。

3）『アシニーアム』1875年11月27日号には、この事実が語られているが、マラルメの書き方とは異なる（p. 717）（後出、p. 88を見よ）。

4）　オクターヴ・タサエール（1807–1874）パリ生まれのフランス人画家。ボードレールは『1846年のサロン』において「最も天分に恵まれ、その才能は恋愛の主題に最もうまく合うような画家」として、彼を褒め称えている。

a）　リチャード・ウォーレス卿（1818–1890）英国の美術品蒐集家・慈善家。

12.　1875 年 11 月 21 日　――　1875 年 11 月 27 日

文学ゴシップ[1)]

Ⅳ(a) 偉大な画家、故ミレーと同じように、農民に叙事詩的気品を与える作家、レオン・クラデル氏は、目下、一冊の書に最後の手を入れており、本書ではケルシー地方のあらゆる風景と典型が描き出されている[2)]。『ル・ブースカシエ』と『聖バルトロメ＝ポルト＝グレーヴの請願祭』に、『クロワ＝オ＝ブーの男』がまもなく加えられるだろう。この作品の校正刷りを注意深く読むと、最も野蛮で、最も原始的な生活の描写にさえ、彼の文のいつもながらの華麗さを発揮し、今日でも尚、かつてラブレーがそうしたように、方言(パトワ)の語彙を用いて文体を豊かにし、刷新するという、この偉大な散文作家が常に持っている可能性に批評家もいっそう納得することになる。クラデル氏は、その再版がこの冬に出ると予告されている彼の最新の書『物乞いたち』の中の一物語である「モントーバン、君は彼を知らないのだろうか」における一場面を描いた、ルグロ氏[3)]の大きくて素晴らしいエッチングをイギリスからちょうど受け取ったばかりである。

1)　『アシニーアム』1875 年 11 月 27 日土曜日号、「文学ゴシップ」、p. 709 を見よ。英文テクスト、後出、p. 88.

2)　レオン・クラデル（1835–1892）地方の作家。ボードレールの友人で弟子。ボードレールは彼の短編集『滑稽な殉教者たち』（1862）を称えているが、ボードレール自身、この著作に手を貸した。『クロワ＝オ＝ブーの男』がシャルパンティエ社から出版されたのは 1878 年 6 月 1 日になってからであった。クラデルは 1873 年から 1878 年まで同社に勤めた。1877 年 8 月 1 日付の書簡で、マラルメはクラデルに本書がいつ出るのか尋ねている。他の 2 つの小説には『我が農夫たち』という総題がついており、『ブースカシエ』は 1869 年 7 月 17 日、『聖バルトロメ＝ポルト＝グレーヴの請願祭』は 1872 年 5 月 18 日に、共にルメール社から刊行された。『物乞いたち』は、初め 1874 年にルメール社から刊行されたが、実際、挿絵入り版の形で、R. レスクリード社より分冊で、1876 年 5 月から 8 月にかけて再版されている。

　亡くなるまでマラルメの近しい友人であり、『文芸共和国』誌に第 1 号から寄稿することになる。

3)　このルグロというのは、ボードレールが『1859 年のサロン』で称えた人であ

る。アルフォンス・ルグロ（1837–1811）ディジョン生まれの画家、彫刻家、エッチング画家。1859年から1863年にかけてのサロンに出展し、成功を収めている。後にイギリスに定住し、1876年から1894年までユニヴァーシティー・カレッジ（ロンドン）で、「リトグラフアーティスト・デザイナー・食刻師協会教授」であった。

13.　1875年11月21日　掲載されず

芸術ゴシップ[1)]

パリの幾つかの大きなアトリエを時折訪れるのは、興味をそそられる。マネ氏は、同国人ティソ[2)]がロンドンに持っている見事なアトリエで、目下、その「ヴェネツィアの片隅」を見ることができるが、『ハムレット』演技中のフォールの等身大、全身肖像画[3)]を、イギリスの展示向けに準備しているらしい。だが、画家が見つけたと覚しき[4)]とてもイギリス的な色調の一つは、既に終わった1876年の〈サロン〉の彼の二枚の絵のうちの一点、「洗濯」の中に明確に表れている（緑の背景が創り出す透き通った陰の上に、戸外で、一人の婦人が、朝の服装で、浮き出て、街の庭で自ら洗濯をして、日射しの染み込んだリネン類を日干ししている）。もう一方の絵は、命そのもののように、拡大され、人を引きつける、モード版画のように現実味を帯びた黒いシルクのドレスに、ショールもコートもなく、黒い羽根のフェルト帽を被るという、街の服装をした若い通りすがりの女の全身肖像画である[5)]。現代の絵画にも、この巨匠の作品にも、これほどあからさまに現代的な風情は殆どない。

★

現在、フランドル絵画展が開かれている会場に据える前に、美術庁が、「石膏像美術館」の計画に執行開始の決定をして、ヨーロッパ各地の美術館に散らばっているあらゆる偉大な彫像作品の複製を間もなく集めようとしているのは、ルーヴルの、ドゥノン館とモリアン館の間にある1階ギャラリーである。

1)　これら2つのメモは共に掲載されなかった。オショネシーはマネに関して、〔『アシニーアム』編集人の〕公式の反感にぶつかったものと思われる。しかし彼は『アシニーアム』1876年4月1日号に、上の〔2つのメモのうちの〕前者を敷衍する、マネに関する別のメモを差し挟むことができた（29号、後出、p. 101を見よ）。

2)　ジェームズ＝ジョゼフ＝ジャック・ティソ（1836–1902）パリ・コミューンの後、ロンドンに居を構えたフランス人画家、版画家。フランドランの弟子。W. E. グラッドストーンに献呈したキリストの人生を描いた水彩画で特に知られる。マネが1874年9月にヴェネツィア旅行を共にした相手は彼だった。マネはここから絵を幾つも持ち帰ったが、そのうちの一点は恐らく、現在ニューヨークのワトソン＝ウェブ・コレクションにある「ヴェネツィアの大運河」であろう（タバラン、242番）。

3)　マネは、著名なバリトン歌手で、蒐集家のジャン＝バティスト・フォール（1830–1914）の肖像画を幾つも描いている。ここで言われているのは、アンブロワーズ・トマ（1811–1896）のオペラ『ハムレット』のことである。『最新流行』の「歳時記」（『全集』〔旧版〕、p. 785）中の、フォールを賞賛する短評を参照のこと。

4)〔原文は、une des notes très britanniques qu’ait peut-être trouvées le peintre となっている。〕マラルメは、当初「最もイギリス的な（les plus britanniques）」と書いていた。そこで、接続法で書かれていたのだが、彼はこれを訂正するのを忘れたのだ。

5)　現在はフィラデルフィアのバーンズ財団にある「洗濯」は、マネの送ったもう一点の絵画と共に、1876年の〈サロン〉の審査委員会によって確かに拒否された。ここに記述されているのは「洗濯」のことではなく、画家、版画家、劇作家にして画商のジルベール＝マルセラン・デブータン（1823–1902）の肖像画「芸術家」のことである。この絵は現在、サン・パウロ美術館にある。もう一点の絵画は恐らく、「パリの女」か「引き裾のドレス」であろう（タバラン、254番、彼の『マネとその作品』、p. 290を見よ）。「洗濯」に関しては、「ゴシップ」31番（後出、p. 70）、32番（後出、p. 72）を見よ。

14.　1875年11月21日　掲載されず

芝居ゴシップ[1)]

ジムナーズ座を大入り満員にしているサルドゥーの『フェレオル［ママ］[2)]』は、大衆にまで知られる前に、パリの文学的というよりは社交好き

な全ての観客を長い間惹き付けるだろう。この有名な目立ちたがり屋が、ありそうもない事柄からいかなる巧みさで抜け出すかは、人の認めるところであるが、そうした事実は、実のところ、おそらく彼の策略と方策の展開に欠くことのできないものなのだろう。しかしながら、上質の悲劇愛好家にさえ、激しく、良質の感情を催させる場面は一つにとどまらない。その作者が常にそうであるのと同様、素晴らしく演出された4幕は、ヴォルムス、ルジュウール、それにドラポルト、フロマンタンの両夫人[3)]と、その一座によって、類い稀な調和と独創性をもって演じられている。

★

『ボヘミアン生活』の再演によってオデオン座が再開された。歌詞はメイヤックとアレヴィ、音楽はマスネの素敵な歌が、ミュルジェールの作品[4)]の中に挿入された。まもなくやってくるのは、とても興味深い風俗研究、『ダニシェフ家の人びと』である。作者はロシア人で、帝国の締め付けを恐れ、デュマ・フィス氏によって舞台に乗せる形を取った。デュマ氏はそれに目を通しただけでなく、恐らく手を染めたのだろう[5)]。

★

ヴォードヴィル座の新作『昨日の醜聞』の成功が際立っており、人は好んでそこに絶頂期のテオドール・バリエールを見るのである[6)]。

★

コメディー・フランセーズで朗読され、〈委員会〉に喝采をもって迎えられたデュマ・フィスの『異国の女』の配役が、専らの噂の種になり続けている。少なくとも女性たちの配役に関しては、今日まで絶対的に確かなものは何もない[7)]。

★

ベルトラン氏との裁判沙汰の後、『パン屋の女房は金持ち』によって、ヴ

ァリエテ座を去ったプリマドンナ、シュネーデルが、フォリー・ドラマティック座に入って、『美しき雌鶏』を演じている。彼女は、カンタン氏のところで既にその朗読に立ち会っていたのだ[8)]。

1)　『アシニーアム』誌はこれらの作品について、別の言い方で述べているが、この断章の全てについては何も取り上げられなかった。

2)　ヴィクトリアン・サルドゥー（1831–1908）19 世紀で最も多作の劇作家の一人。1875 年 11 月 17 日、ジムナーズ座の舞台で初演された 4 幕散文喜劇『フェレオル（*Ferréol*）〔マラルメは '*Féréol*' と誤記しているので「ママ」となっている〕』は、V. サルドゥーの『全劇作品』の第 12 巻（パリ、アルバン・ミシェル社、1951 年）に収められている。この作品は X. ヘイズによって英訳され、1876 年にパリで刊行された。

　サルドゥーの「鰐」評が、『独立評論』誌、1887 年 2 月 1 日号に載ることになる。

3)　ギュスターヴ・イポリット・ヴォルムス（1836–1910）、フランソワ・ルイ・ルジュウール（1819–1876）、マリー・ドラポルト（1838–1910）、レオンティーヌ・ドゥヴォー（フロマンタン夫人となる）（1840–1887）はいずれも喜劇俳優。

4)　テオドール・バリエール（1825–1877）とアンリ・ミュルジェール（1822–1861）による 5 幕、歌入り劇『ボヘミアン生活』は、1849 年 11 月 22 日、ヴァリエテ座で初演され、何度も再演された。パリ、ドンデイ = デュプレ印刷所、1849 年。

5)　『ダニシェフ家の人びと』は、ピエール・ネウスキー氏（ピエール・コルヴァン・ド・クルコウスキー）〔(1844–1899）フランス在住のロシア人文学者〕による 4 幕散文喜劇。（パリ、オデオン座、1876 年 1 月 8 日）――パリ、C. = レヴィ社、1879 年。同著者『ロシアにおける演劇』、パリ、A. サビーヌ社、1890 年。

6)　テオドール・バリエールによる 3 幕喜劇『昨日の醜聞』は、1875 年 11 月 15 日、ヴォードヴィル座で初演され、同年、C. = レヴィ社から刊行された。――テオドール・バリエールは、単著または共著で『ボヘミア生活』を含む 100 ほどの劇作品を書いた。

7)　5 幕喜劇『異国の女』（コメディー = フランセーズ、1876 年 2 月 14 日）は、1877 年、C. = レヴィ社から刊行された。

8)　カトリーヌ = オルタンス・シュネーデル（1838–1920）は、イポリット・コニアールがヴァリエテ座を率いていた 60 年代に、オッフェンバックのオペレッタの主演女優だった。彼女は『美女エレーヌ』『青ひげ』『ジェロルステン大公妃』などで異彩を放った。――アンリ・メイヤックとリュドヴィック・アレヴィ、音楽ジャック・オッフェンバックによる 3 幕喜歌劇『パン屋の女房は金持ち』（ヴァリエテ座、1875 年 8 月 5 日）は、1875 年、ミシェル・レヴィ社から

刊行された。――ウジェーヌ・ベルトラン（1834–1899）は、1869 年から 1892 年からヴァリエテ座を指揮した。1892 年からオペラ座の支配人となった。――ルイ・カンタン（1822–1893）は、オーケストラ指揮者で、1871 年頃から 1878 年までフォリー＝ドラマティック座を率いた。彼の指揮の下、芝居はオペレッタに特化され、ブッフ・パリジャン座、ヴァリエテ座と競った。カンタンは、Ch. ルコックの『アンゴ夫人の娘』〔『最新流行』に取り上げられている〕と R. プランケットの『コルヌヴィルの鐘』を上演した。後に、ブッフ座、エデン劇場の支配人にもなった。

15.　1875 年 11 月 27 日　――　1875 年 12 月 11 日

文学ゴシップ[1)]

V (b) パリのシーズンの初めに、重要な書が刊行された。休息の時期のようなものがあり、今度は新たな定期刊行物の番だ。ここ数年の文学史の中で 1875 年を、一時代を画するものにするだろう事件は、『文芸共和国』という雑誌の登場である。それが発行される真面目な出版社は、是が非でもこの雑誌を存続させようとしている[2)]。厳密かつ純粋に文学の雑誌であり、その名前と、フローベール、E・ド・ゴンクール、ルコント・ド・リール、テオドール・ド・バンヴィルなどの巨匠たちの新作、さらにゾラ、クラデル、ドーデといった力漲る才人たちの傍らに、少し将来が嘱望される者なら誰でも、その華々しいデビューが見られるだろう。これが大方のコンセプトである。この雑誌は結局、回顧的な研究、1830 年のロマン主義の時代の殆ど知られていない、稀な作品の再現にさえ、多くのページを割くことになるだろう。現代イギリスの主だった詩人であり、フランス文学にも入り込んでいる人たちの幾人か、スウィンバーン、オショネシー、ジョン・ペインの各氏に、パリの小説家、詩人の選良によって試みられている作品への協力を要請した。この文集の指揮を任せられているのは、カチュール・マンデス氏である。その創刊号は来る 12 月 15 日が予定されている。

(a) プロヴァンス文学が、我々に新刊書を幾つか約束しているが、その断章

は既にアヴィニョンからアルル、マルセイユに知られている。1 冊は、現在の運動の指導者、フレデリック・ミストラル氏の書であり、『ミレイヨ』と『カレンダウ』という田園恋愛詩、叙事詩の後、抒情詩集『黄金の島々』を届けてくれる。あとの 2 つは、プロヴァンス語作家、フェリックス・グラとタヴァンの書であり、詩篇『炭焼きたち』と、文集『愛と涙』である[3)]。

1)　これら 2 つの断章は、最初の断章がかなり約められて、『アシニーアム』1875 年 12 月 11 日土曜日号、「文学ゴシップ」、p. 792 に掲載される。英文テクスト、後出、p. 90.

2)　初め月刊だったこの雑誌は、1876 年 8 月に隔週刊になった(『アシニーアム』1876 年 8 月 19 日号、p. 245 を見よ。後出、p. 103 にもこの事実が告げられている)。この雑誌の歴史に関しては、H. ルージョン『半身像の画廊』、パリ、リュフ社、1908 年、p. 171–180 参照。マラルメ自身もカチュール・マンデスと共に、『文芸共和国』誌のリーダーになった。

3)　偉大なプロヴァンス語作家にして、『ミレイヨ』(1859)と『カレンダウ』(1867)の作者、F. ミストラル(1830–1914)は、1876 年、アヴィニョンの J. ルーマニーユ社から、フランス語対訳付きで『黄金の島々』を刊行した。――フェリックス・グラ(1844–1901)は、ルーマニーユの義弟で、ミストラルの弟子、叙事詩人、抒情詩人、短編作家、小説家で、同出版社から『炭焼きたち、12 の歌による叙事詩』をフランス語対訳付きで刊行した。マラルメはトゥールノン、アヴィニョン時代に彼と知己になった。――アルフォンス・タヴァン(1833–1905)は、シャトー = ヌフ = ド = ガダーニュの農民詩人で、1876 年、マルセイユの M. ルボン社より『愛と涙』を刊行した。

16.　1875 年 11 月 27 日　――　1875 年 12 月 11 日

文学ゴシップ[1)]

(c)『文芸共和国』の発行者、アルフォンス・ドレンヌ氏は、自らの印刷機から、この時代のフランスの活版印刷の真の傑作を出すのを見ることを望んでおり、これに関して、趣味と教養のある人として、『半獣神の午後』という詩篇を選んだ。これがステファヌ・マラルメ氏に依頼された 100 行ほどの田園詩の題名である。特別に鋳造されたエルゼヴィル活字体で、手作りで薄片に選り分けられた紙に手動で印刷されることになっている。今日では共

に希少なものである。小さな四つ折り本のイラスト、即ち、本文外では挿絵一葉、本文中では花形模様、章末のカットは、エドゥアール・マネ氏の手になるであろう。彼は既に、この夏、同じ詩人による E. ポーの『大鴉』の版のイラストをしている。これらピンクと黒による二色刷りの木版は、日本の手法を真似た、ヨーロッパ初の試みである。希少なままであり続けるだろうこの小冊子は、極めて少部数作られ、文学者の興味を引いているが、それは恐らく今述べたばかりの技術的で、特別な細部のためというよりは、その貢献にはこうした贅沢全てが必要だと判断された対象が、文学であり、最も高級なもの、詩に対するものだという事実のためである。これは数年前のフランスでは起らなかったことであろう。

1）『アシニーアム』1875 年 12 月 11 日号、「文学ゴシップ」、p. 792 と、後出、p. 90 を見よ。最終文の冒頭のみが翻訳され、あまりにマラルメ特有で、意味深長な終りは省略された。このパラフレーズは、マラルメが自らの詩に付与した重要性に疑いの余地を残していない原文に比べると、平板である。A. ドレンヌに関しては、H. ルージョン、前掲書、p. 172 を見よ。ここで彼は「産科学の学位論文を出版し、カフェに行くほうが好きだった懐古的気質をもった出版業者」として描かれている。この「ゴシップ」は『全集』〔旧版〕、1956 年、p. 1459–1460 に掲載された。

訳者後記

本稿は、マラルメのフランス語原稿の翻訳の続き、第 3 回である。

今回の翻訳箇所では、少し前に書かれた『最新流行』でも見られたような、（；）（：）を用いて、息の長い文を連ねて行くマラルメ独特の文体も見られ、16 番のゴシップの註 1）でも指摘されているように、英訳にも窮したと思われる部分も散見される。

また、同じく 16 番のゴシップの末尾に記された「希少なままであり続けるだろうこの小冊子は、極めて少部数作られ、文学者の興味を引いているが、それは恐らく今述べたばかりの技術的で、特別な細部のためというよりは、その貢献にはこうした贅沢全てが必要だと判断された対象が、文学であり、

最も高級なもの、詩に対するものだという事実のためである。」という一文からは、マラルメの詩人としての矜持を看て取ることができる。しかし、マイナーなこれらのテクストは、マラルメ研究者の間でも省みられることが少ないために、引用されることもなく見落とされている。これらのテクスト群がもっと丁寧に読まれてしかるべき所以である。

尚、とりわけ演劇に関する項目は、この分野に明るい諸賢による訂正、補足をお願いしたい。

底本にしたテクストは以下の通りである。

1. Mallarmé, *Œuvres complètes*, II, Édition présentée, établie et annotée par Bertrand Marchal, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 2003, pp. 416–440, 1698–1702.〔今回訳出したのは、pp. 425–430, 1700–1701.〕

2. Les *gossips* de Mallarmé, *Athenaeum* 1875–1876, textes inédits, présentés et annotés pas Henri Mondor et Lloyd James Austin, Paris : Gallimard, 1962, pp. 19–75.〔今回訳出したのは、pp. 38–50.〕

体裁は、前稿を踏襲している。1 の新プレイアード版全集による新たな原稿の発掘は、本稿の中にはない。